

## 街に向けて表現すること

環境社会計画専攻4回生 津賀 高幸、鯉住 良治  
大学院環境計画学専攻 環境意匠コース 中倉 伸顕

7年間放置されていたビルに突入した瞬間から2年半以上の時が過ぎた。思い起こせば酸いも辛いもいろんなことがあった、と嘆息にふけてしまう。個人的には血や肉になる貴重な経験であったし、街に対してもACTが始まってから、地元主催のイベントが増えたり、空き店舗の活用が進んだりして、それなりに影響は与えられたと思う。

私たちは、この地域のまちづくりに責任を負っているわけではないし、地元の方も私たちの活動が空洞化する市街地問題の救世主であるとは考えていないだろう。今にして思えば私たちは、「イセヤビル」という商店街の中のステージで、街というお客さんに向かって、「こんなやりかたもあるんじゃないの?」というメッセージを発信していたと思う。

本稿では、2年半にわたる表現活動を通じて、舞台装置をどのように創り上げていったか、そこでどのような演目を行ったか、お客さんはどう反応してくださったか、について述べようと思う。

### 1) 舞台装置

イセヤビルは銀座、登り町、花しょうぶ、橋本の4つの商店街の交差点に位置する7階建てのビルである。彦根初のテナントビルで、ACTは、美容室だった1階部分と旧喫茶店だった2階部分を借りた。当初の構想では、1階部分をカフェサロンに、2階部分をライブハウスとして使用する予定であった。

7年間放置されていたため、ACTの活動は掃除をすることから始まった。しかも水道、トイレ、電気、ガスといったライフラインがまったくなかったので、作業は大変であった。音楽やデザイン関係の学生が多数参加し、これからこの場所で何をしようかワクワクしながら作業をしていた。

98年10月にオープニングライブでデビューした

ACTは99年1月にはサロンという形で、「街と学生の憩いの場」をオープンさせた。しかし、トイレは仮設で、水は近所からお借りするという非常に原始的な状態だった。

99年3月にサロンの2回目の全面改装工事を実施した。この時に、商店街連盟の支援でトイレの予算がついた。またACTに隣接する旧パチンコホールがイベント会場として使用できることになった。後にこのスペースはビルのある久佐の辻にちなみQ座と呼ばれることになる。

さらに、99年4月に新入生を街で歓迎する若葉祭の実施が決まり、ACTは「若葉祭」の企画と協賛取り、上下水道工事、サロンの内装工事、イベントホール改装工事の4つの事案を同時並行で処理することになってしまった。

新しくオープンするイベントホールを若葉祭のメイン会場とし、新入生を新しいサロンで迎えたかった。しかし、工事が押してしまい、イベント前日は徹夜で床板張りをするなどの突貫工事で、近所から騒音に関するクレームがつけたりした。

経費節減のため、学生が労力を提供し業者さんに人件費をほとんど値引きしてもらった。みんなで、水道管を埋めるための穴をドリルで掘った。5月には商工会議所の有志によって、空調設備が取り付けられた。夏の暑さを心配していた折、大変ありがたいことだった。

そして、5月に2度目のサロンオープンを迎える。先の改装工事で、サロンにはキッチン、カウンター、カセットコンロが設置され、食生活コース出身のマスターがいれば、簡単な料理も出してもらえた。このときは、学生が交代でサロンに詰めるという方式で開店した。ACTの存在を知った街の人が、イベントの持込や受付、ビル壁面へのピラ掲示などいろんな形でサロンにやってきた。Q座と名づけられたイベントスペースで、ライブ



写真1 イセヤビルの外観

をしたいと希望する人が多く、その関係でくる人も多かった。また、学生も学校終了後に友達の関係などで集まってきて、漫画、軽食、映画などを楽しみ、溜まり場として機能し始めていた。

2000年3月にサロンの本格営業を念頭に置いた改装工事に着手した。

外観を良くするために、玄関に格子を取り付けたり、壁板を張り替えたりした。変化は一目瞭然で、通りがかりの方からも評判がよかった。前年の若葉祭では労力の割に新入生が集まらなかったが、今年は新入生を逐次改装作業に誘い込んだ。すると、参加する喜びがあるのか、昨年より多くの1年生が定着してくれた。また、昨年と違って夜まで作業が及ぶこともなく、レベルも格段にアップした。早春の暖かな日差しの中で私たちは作業をしていた。

しかし2000年5月、とてつもない問題が発生する。ビルのオーナーが立ち退き勧告を出してきたのだ。何でもビルを転売するのだという。工事は完成間近。サロンの本格営業がすぐそこまできていたというのに、である。サロン営業構想からすでに1年以上の時が過ぎている。にもかかわらず、未だ実現しないのか...。「営業」することについて地元との調整も難航していたおりであった。立



写真2 水道管工事

ち退き期限は、2000年6月中ということだった。

これほど強くこの場所が必要であると認識したことはなかった。対応を協議する総会には50人近い学生が集まった。熱い議論になったが、人数が多いため話は錯綜し深夜まで会議は続いた。そして、結論が出た。せっかく創ったサロンだから、残り1ヶ月だけでも営業しようではないか。

残りの工事、試食、メニュー作り、広報、オーナーさんへの継続使用願いのプレゼンテーション、万が一に備えての代替物件の調査...。みんな一丸となって、サロンの準備に邁進した。かつてないハイテンションのときを経て、サロンはオープンした。

1ヶ月間でのべ1000名近い方が来店して下さった。いろんなことがあったわけだが、何はともあれ一つの理想が形になったのだ。

また、営業期間中に隣のQ座で最後のライブが開かれた。内田勘太郎がゲストである。このまま続けていれば、もっともっと大物アーティストを呼ぶことができたかもしれない...。ライブ担当の無念さは相当のものだっただろう。

というわけで、公式にイセヤビルを使用しての活動は6月末で終了した。しかし、新しいオーナーさんとの話し合いでまだ当分はいさせてもらえそうな雰囲気ではあるが、先のことはわからない。

### 2) 演目

ACTでは2年半で、大小あわせて100本近くのイベントを打っている。その中から代表的なイベントを4つ紹介する。

《若葉祭》(99年4月)

大学生活がスタートすると、商店街なんかに来る機会などまったくない。そうなるまえに、新入生をかっさらってきて商店街になじませようというコンセプトだった。ライブやオークション、料理の振る舞いに日高学長のシンポジウムなどを開催。バスをチャーターして、70人の新入生を商店街に送り込んだが、式典の市長の話が長すぎて、その間に新入生がどこかに消えてしまうというハプニングがあった。

《オーケストラ》(99年4月)

彦根市民オーケストラの演奏会をQ座で実施。廃墟だったビルとオーケストラのミスマッチがよかった。当日は、スピーカーを屋外に向けて設置した。街にオーケストラがながれ、ご近所や通りがかりの人の注目を集めた。

《湖国21世紀記念事業シンポジウム》(2000年3月)

滋賀県からの依頼を受けて実施したシンポジウム。2部構成で1部は建築プロデューサー浜野安宏氏、たねや社長の山本徳次氏をお招きし「遊び」をテーマにパネルディスカッション、2部は市内の「遊びの達人」3名にお越しいただきワークショップ分科会を実施した。ゲストに人間文化学部細馬宏通氏、県林業課寺尾尚純氏、編集プロダクション北風写真館の杉原正樹氏をお招きし、それぞれ「水の音風景」「竹で遊ぼう」「まちを歩こう」の企画を実施した。企画は主に社会計画の人間が担当し、演出は建築の学生が担当した。

《プロライブ》

豊田勇造、バンバンバザール、ブルースファイ、中本マリ、内田勤太郎といったプロのライブも実現した。初期のころは、学生や地元の若者が出演していた、彦根の音楽関係の方が途中から企画に参加していただけるようになり、このようなゲストにきていただくことが可能になった。

音楽関係の方のネットワークと学生の実務力が



写真3 バンバンバザールライブ

組み合わせることで、夢はかなり広がった。それだけに、Q座の閉鎖は惜しまれるのであった。

### 3) コミュニケーション

保守的な人々とのやりとりが初期のカルチャーショックであった。若葉祭の企画で地元の方の協力を仰ごうとしたとき、「学生に何が出来る」と言わんばかりの態度に面食らってしまった。学生を商店街に招くことに対して、全ての方が賛同していたわけではないのだ。当時は大変落ち込んだ。しかし、今にして思えばいろんな考えをする人がいて当然なわけで、今ならもっとうまく企画できるだろうと思う。なお、若葉祭で協賛を頂いた地元企業の方にはその後も何かとお世話になることがあった。

99年4月にイベントスペースQ座がオープンしたのだが、運営は商店街が担当することになった。その後ACTのライブ等のイベントをたび重ねたため、Q座=ACTのイメージが定着してしまった。また、地元でACTの活動を理解してもらいより先に、テレビや新聞で大々的に取り上げられた。こういった事情から、地元の反発が蓄積していったかのように思える。

ACTに触発されたのかどうかはわからないが、99年10月に商店街企画でハロウィンパーティが行われた。私達はお手伝いということで参加したのだが、ここでは述べないがいろいろ大変な目にも合った。そして、00年2月にたまりに溜まった近隣の方の不満が爆発。ライブのことで猛烈なクレームを頂いてしまった。日高学長が呼び出されるなど大変なことになってしまったが、後に地元と



写真4 花しょうぶ商店街のイベント

話し合いを持ついい機会となった。

活動を続けていると、商店街の方からいろんな依頼を受けることになる。99年6月に市場商店街の宅配サービスの実務を担当した。夕食のおかずなどを近所のご家庭に配達するのである。路地裏を訪ね歩き、街の方と触れ合う貴重な体験になった。

2000年になり、提供できる企画もグレードアップしてきた。00年6月には、花しょうぶ商店街の勝負市2000に企画を持ち込んだ。商店街のバザーと愛知県瀬戸市や彦根近辺の芸術家の作品展示を行なうイベントである。アートディレクションや芸術作家の手配などを行ない、商店街イベントにちょっと違った演出をすることができた。

彦根では毎年夏に商店街の夏祭や灯籠流しや総踊りなど多くの行事が行なわれる。2000年はそれに加えて、「きてみてkids」という商店街主催のイベントが開催された。企画から当日バイトまで、メンバーが様々な形態で各種イベントに別れて手伝いをした。特に登町商店街では街のホールで県大の劇団深夜特急の公演を行ない好評であった。

秋口には銀座商店街よりイベントの依頼が来る。それに対して、ゼロから学生の手で企画を行ない、12月には空きビルを布で覆ってライトアップするという演出イベントを行なった。

### 4) 今後

こうしてみると、商店街での2年半は貴重なフィールドワークであったといえる。街に出て当事者として活動してみると、街がどのように動いているのか、どんな人が何を考えて行動しているの

かがよくわかる。

中心市街地空洞化問題が、まちづくりの大きなテーマとして盛んに取り上げられる。しかし、それが地元にとっても大きな問題かという、一概に言いきることはできない。生活環境や商売の状況やその他のいろんな要因により、個人個人の温度差が発生する。まちづくりには、一般論はない。だからこそ、個別の事例を肌で感じておくことが大事である。

イベントの提案ひとつするのでも、いろんな価値観を織り交ぜていかねばならない。その過程で悔しい思いをすることもあるかもしれない。それでも結果を出してみるのが街中でやる価値であり、醍醐味であろう。

彦根市でも中心市街地活性化は重要な問題として位置づけられており、様々な助成事業を行なっている。しかし、補助金の有効な使い道に関しては各商店街精一杯工夫をしているが、まだまだアイデアが求められている状況である。これは街にとっても学生にとってもチャンスなのだ。いいアイデアを出せば、ビジネスが発生するだろう。

ライブなどのイベントで自己表現をすることで、街の賑わいに一役買うことはできる。それもいいのだが、今後はもっとお金につながるようなアイデアをぶつけてもいいのではないだろうか。その方が街に対して直接的なインパクトを与えられるのではないかと思う。

ACTの2001年度活動予定は、今のところ未定である。現在のビルがいつまで使えるかもよくわからない。それでも、今後まちと学生をつなぐ役割は持ちつづけていきたいと思う。

社会というものに対して、自分たちの考えをぶつける。そんなフィールドは環境科学部にとっても、不可欠なものではないでしょうか？

(文責：鯉住良治)

## 「竹取プロジェクト」

環境生態学科 陸園環境大講座4回生 伊藤 浩二

竹取プロジェクトは環境科学・人間文化・工学部の学生約10人ほどで“竹”を使ったユニークな活動しています。大学のそばを流れる犬上川の両岸には、マダケなどの竹林が多くあります。身近な存在の竹ですが、このごろ人との関わりが薄くなっているようです。それを象徴するように犬上川の竹林は荒れ放題。風雪でなぎ倒された竹が折り重なり、鬱蒼とした林には中に入る気も起こらない。はたして昔からそうだったのでしょうか？

竹はもともと建築・農業・竹製品の資材を得るために、タケノコを取るために、堤防を強化するために、使われてきました。川の周りの竹の多くはそのために植えられたものです。でも竹の利用が減り、竹林は利用されなくなりました。切られずに放置されたタケはどんどん他の林を侵食し、高い木だけを残して他の木々が生育する環境を奪っています。タケが支配した林の中は暗くなって、太陽の光が十分注がないと生育できないクザキイチゲのような小さな林床植物は、犬上川から消えつつあります。林の植物の多様性が失われると昆虫や鳥や獣も姿を消してしまいます。このような現象は全国各地で問題となっています。人が植えた竹を、必要でなくなったからといって放置していいのか、昔の知恵を活かして役に立てられるものがあるのではないかと、という問題意識で、放置された竹を切って使う活動を始めました。さらに、ただ竹林を整備するのではなく、竹を使って遊んでしまおうと考えました。

具体的な活動としては、犬上川河口近くの竹林を所有者からお借りして竹林の手入れをしています。竹の生育密度を調べ、込み合ったところをナタやのこぎりを使って間伐していきます。傘をさして歩けるくらいの密度が手入れの目安です。そして、間伐した竹の一部を、オイル缶を改造して作った炭焼き釜で炭にしています。これは何度か

挑戦したのですがまだ満足できる出来栄にはなりません。また、一度に炭にできる量はごくわずかで間伐した竹を処理しきれないのが悩みです。炭の他には、お箸やコップを作ったり、不思議な音のする楽器を作って演奏したり、すだれを編んだりしています。そのような作品は湖風祭や多賀町立博物館で展示して、見に来てくれた人に製作を体験してもらったりもしました。また竹の筒でご飯を炊いたり、竹を心棒に生地をつけてパウムクーヘンを焼いたりしました。さらに春にはタケノコ掘り、夏は割った竹の樋で流しそうめんをするなどして季節ごとに楽しんでいます。

炭を焼いているとき近所の方が「わたしにも炭の焼き方を教えてほしい」と声をかけてくれたり、子どもはもちろん大人も夢中になって竹細工に挑戦する姿をみる時は嬉しいものです。またNHKの朝のローカルニュースでプロジェクトの活動が紹介されました。少しずつですが私たちの活動が周りの方々にも伝わってきていることを感じています。

今後の予定としては、彦根市内の整備されていない竹藪を持ち主の代わりに整備する出張整備や、県立大学の環濠の水を竹炭を使って浄化することを考えています。今までの活動のように完成した物だけがみんなの目に映るものから、その行程が見えるものへ変えていければと思います。



## フィールドワークゼロ

～「学生の手による講義」の試み～

フィールドワークゼロ実行委員会

フィールドワークゼロは、けっして成功と言えるものではなかった。しかし、この試みが実行に移されたことに、大きな意義があると思う。その理由に、環境科学部の科目「環境フィールドワーク」のもったいない現状がある。

「環境フィールドワーク」は、環境科学部の看板科目として、開学と同時に生まれた。履修の手引きによれば、1回生「フィールドワーク」で「地域環境問題の発見と把握」、2回生「フィールドワーク」で「地域環境問題の解析」、3回生「フィールドワーク」で「環境現象/環境問題の構造化」がそれぞれテーマになっている。

ところが現状を見ると、当初は土曜日1日をかけて実地調査をしていたというフィールドワークは、週1回午後半日×3週の中に講義、実地調査、話し合い、発表が詰め込まれている。入学直後の落ち着かない中、とりあえず出席して適当なレポートを出せば単位が確実にもらえて気がつけば終わっている。フィールドワークは、1つのテーマを選んで半年をかけるが、学科横断を謳っているはずの環境フィールドワークはここですでに学科専攻間の分断が始まる。学科専攻に関係なくどのテーマを選んでよいことに一応はなっているが、各テーマを見れば内容・担当教員ともに明らかに特定の学科専攻に依存したものが多数を占めており、学生は暗黙のうちにそれにしがたって選択をする。そしてフィールドワークは、1年目こそ学科横断の形式をとっていたが、わずか1年で学科分断の形となっている。学科によっては、もはや「環境フィールドワーク」は名前だけで各学科の卒業研究の前段階としての演習科目とも考えられるものになっている。

これでは、4つの学科専攻が「環境科学部」の名の元に集まっている意味がない。卒業研究前の演習を各学科でやりたいのなら、それはそれで環境フィールドワークとは別に時間を設けて行えば良い。4つの学科

専攻が集まっているという利点を生かさず、バラバラにやっているのでは、「環境科学部」は大学新設のためのアリバイでしかない。

この状況の中で、「無い物は作ればいい」と考えた。第1に、「興味あるテーマと自分との関係」についてスタート地点に立つ前に考えられたいい。自分にとって必要な情報と知識が何であるかを判断できるようにするためだ。そうすれば、講義を有効に聴くことができる。第2に、「学科、さらには学部の枠を乗り越えて、話し合い、考え、実践していく」ことができたいい。学部が違うと考え方や興味の持ち方が違う事がある。同じ考え方の人と一緒にだと、いろんな立場になって考えられる多面性は身につかない。同じテーマでも違う分野の人とそれぞれに話し合うことができたら、新しい魅力が出てくるのではないだろうか。そして、「学年に関係なく参加」できたいい。先輩はおいしい存在ということに気付いた方がいい。知識や経験が豊富である上に、ときには資金面でも強力な助っ人といえる。

このような構想のもと、昨年度4月からサークル活動のひとつとしてフィールドワークゼロは開始されることになる。その活動内容はいわゆる「学生の手による講義の実施」であった。講義で取り上げるテーマは大学という身近な場所を対象に選ばれることになっている。

テーマとして何を取り上げるかを考え、そのテーマについて学習するための半年間の実施計画を担当者となる学生自らが作成する。おもに新入生を対象に参加を呼びかけ、自主的な学習活動としてフィールドワークおよびプレゼンテーション(中間発表および最終報告会)を行なう。これらの結果を最終報告書としてまとめ、必要ならば次年度以降も継続していく。

これが当初のフィールドワークゼロの実実施計画であ

った。しかし残念ながら、学内においてフィールドワークゼロの存在すらあまり知られることはなく、活動の終焉を迎えることになってしまった。

反省会においては「発想は良かったかもしれないが、実際にやってみると無理があった」、「とりあえずの結果としてはこれでいいのかもしれない」、「しかしこの活動を実施した意義を言えるだけの成果を果たして示せたのだろうか」、「続けるだけの勢いが無くなってしまったのにはそれだけの理由があるに違いない」など様々な意見が出された。

テーマによっては、不十分なまま中途半端な結果に終わってしまったものもあった。

しかしこれは、すべてが自主的な取り組みであったからでもある。制約のない中で、自主的に取り組み、一定の成果があげられたことに、今回のフィールドワークゼロの意義があると言えるだろう。

ただし、このまま中途半端に終わらせてしまっているのだろうか、という疑問は残る。この半年間の活動によって、フィールドワークゼロの課題や改善すべき点がようやく見えてきたように思う。

フィールドワークゼロのこだわりは学習する前の「自分とそのテーマとの関係探し」である。…何の前触れもなく、地球環境の話が始まる、行ったことのない国の話が始まる、顕微鏡の中の微生物の話が始まる、遠い昔の異なる文化の話が始まる。へえ、すごいなあと聞いているだけで、誰もそのことを学ぶ理由を考えない、ただ知識として学習するだけに終わる。実生活では必要のないことなのか、知的探求心を満たすためなのか、そんなことすら考えないまま、講義にただただ出席する日々が続く…。気が付けば就職活動と卒業研究に追われる4回生である。

大学の講義をせっかくならばもっと有意義に聴くことはできないか。そのためには学習する側にも準備が必要である。何を自分は学びたいのか、何のために大学

に来てその講義を履修するのか、そのことを考え、発見し、そして自ら学ぼうとする。その準備のために、フィールドワークゼロのような取り組みはあるのだと思う。

何も残せないままに終わってしまった今は、理想論をただ述べているに過ぎない。学生のやることとはいえ、半年間すら十分に運営・管理できず、結果もあやふやなまま終わりを迎えてしまったという反省の思いが強い。学内へのPR・広報も、せっかく参加してくれた新生へのケアも十分にできないまま、気が付けば10月の最終報告会である。担当者の個人的な理由で、ほとんど報告できないテーマもあった。発起人である僕自身は、活動を他の人に任せて大事な時期に居なくなっているという有り様。フィールドワークゼロが一年目で終わってしまった理由を挙げ始めたら、きつときりがないだろう。

もし今後、フィールドワークゼロのような取り組みが行なわれるのならば(僕自身はそのことを願っている)先生方や事務局、必要であれば学外の協力を集めることをすべきである。経験の少ない学生だけでは、運営を維持していくだけでも困難で、資金面でも学内での活動とは言え諸経費はかかってしまうからだ。とくに先生方には勉強会に参加していただくなどして、講義だけでは聞けないような話をしていただけただければ、さらにすばらしいだろう。

本来ならば、前年度の反省を活かして改めてフィールドワークゼロを実施することが必要であり、協力および応援して下さったみなさんへの礼儀であるに違いない。しかし中心メンバーの多くが卒業や就職、進学により活動の継続をできないために、そのことは不可能となってしまった。フィールドワークゼロのような取り組みが本当に必要かどうか。今後、何らかの形で学生が講義へ参加する準備をできるようなゼミ勉強会等の開催、もし必要であれば実現できないものだろうか。

(文責：森 恵生・青柳 純)

## 卒業研究・制作 / 修士研究2000